Letters
Arpak
レターズ・アルパック
VOL.241　ISSN 2432-5295

自転車

CONTENTS

◆【自転車】…01 ～ 04
◆今、こんな仕事をしています…05 ～ 08
◆近況＆イベントのお知らせ…09 ～ 10
◆まちかど…裏表紙

自転車

自転車ほど手軽でポピュラーな乗り物はありません。徒歩よりもはるかに速いし運転免許も不要です。そして、世界中で人気です。

自転車で思いつく国といえばかつては中国でしたが、今はどこでしょう。自転車大国オランダとか、ツール・ド・フランスからフランスを連想するでしょうか。自転車の発明に関しては諸説あるようですが、ヨーロッパが発祥というのは間違いなさそうです。

ところで、移動速度を徒歩が4キロメートル／h、自転車が20キロメートル／h、自動車が60キロメートル／hとすると、自転車は徒歩の5倍、自動車の3分の1です。街の中では速度が遅いほど街並みの細かな表情を感じることができます。速いと街並みの変化（シークエンス）が意識されます。自転車は、徒歩と自動車の間のほどよい速度で街と向き合える移動手段と言えますね。

レターズアルパック編集委員会

自転車に乗って

長沢弘樹：
サスティナビリティマネジメントグループ

船場センタービルの喫茶店

ふらりと喫茶店に、それも昭和な感じの店に入るのが好きなのだけど、そういう店は自転車でないとと思う。徒歩もよいけれど、徒歩だと普段と違う道をわざわざ選ぶことについ億劫になってしまうところが、自転車だとそのハードルをひょいと越えることができ、所在を変えたときなどちょうどよい。自転車に乗ったときの、自分のテリトリーが広がっていく感じが好きなのだろう。

大阪事務所がOBPから船場（淀屋橋）に移転したときもそんな感じで、当時はMY自転車があったから、事務所近く～概ね1キロ四方～の喫茶店にはかなり行ってみた。隣のトレードピアの地下の店のようにコロナ等で閉めた店もあるけれど、事務所の地下のように短縮営業でしぶとく続く店もあり、ついついチケットを買ってしまう。

コロナをきっかけに事務所の頻度は下がったけれど、自転車のなくなった今も、夕暮れ時など、機会を見つけては喫茶店に足を運ぶ。丼池筋を南に、あるいは八百屋町筋まで、果ては船場センタービルまで足を延ばす。気分で向きを決めれば、即座に店が浮かぶまでになった。

自転車のよいところは、移動しながら街の、通りの変化に気づけることだろう。ただそれは乗り方に、具体にはスピードによる。近年激増したLUUPにも何度か乗ったが、最高速度が時速15キロメートルから20キロメートルになり、乗った感覚が散歩モードから移動モードへと不可逆的に変化し、道を進みながら同時に街を理解する余裕がなくなったことを痛感して、つくづくそう思った。

スピードが認識能力を支配するというのは、下部構造が上部構造を規定するということに近く、自分では操作しづらい類のものだ。とすれば先述の2つのモード、つまりスピードを意識的に使い分けることが必要になる。ついつい移動モードになりがちな自転車を散歩モードに引き寄せつつ、これからも自転車に乗りつづけたい。

＊　＊　＊

気づけば入社から20年余り。京都事務所の移転を機に、異動することになりました。次も自転車で自分のテリトリーを広げていければと期待しています。

帰り道

辻寛太：
地域再生デザイングループ

「なにもしていないと倒れるのに、作った人すごいな～」が小さい頃の感想でした。「前輪だけがくねくね回るし、なんで小さいギアの方が大きいギアより早く走れるんだろう」、こんなことを思いながら走っていると、幼稚園の時には田んぼに落ち、小学生の時には転んで血だらけになり、どちらも通りがかりの人に助けてもらって家に帰ったのが幼い頃の思い出です。

幼い頃の記憶と一緒にある「自転車」ですが、自転車の一番の良さは友達と乗ることにあると思います。高専時代、僕は家から高専までの10キロメートルの道のりを自転車で40分掛けて通っていました。大きな橋が二つ、冬の朝には山からの吹きおろしで全く進まないなんてこともあり、「クソが！」と何度か叫んだこともありました。けれど、自転車で通うことが嫌になることはありませんでした。

その理由は自分より家が遠くにあり、毎週木曜日に必ず一緒に帰る友達がいたからです。その友達は陸上部で、木曜日が休部日でした。当時僕は何もしていなかったので、週に一度だけ二人で帰る時間がありました。車道にクロスバイクを並ばせ、順番を入れ替えながら話すこともせず、淡々と漕ぐのが僕たちの帰り方でした。風よけになりながら時に引っ張り、時に引っ張ってもらい、会話が無くても運動を通じて意思疎通ができている感じがして、心地よい感覚でした。それでも、帰り道のわずかな農道ゾーンは好きで、横並びに学校の話をしました。普段は一人で帰る道を、週に1回だけ誰かと一緒に帰る時間はとても楽しかったです。

話は変わりますが、先日仕事で地方のローカル線に乗った際、ワンマン電車の中にはたくさんの高校生がいました。ローカル線で通学をしても、ローカル線なりの素敵な思い出が出来そうだなと思いながら、ふと自分の高校時代の帰り道を思い返しました。

自転車が一年で一番心地よい季節に、もう一度体力を付けて友達と走りたいなと思いました。

相棒とおでかけ

中村孝子：
企画政策推進室

「まるたけえびすに、おしおいけ、あねさんろっかく……」京都人なら誰もが知っている京都のわらべ歌。CMの影響で東西の通り歌の方が有名だけれど、南北もあります。古くは長安の都にならって作られた「条坊制」と呼ばれる都市計画で誕生した通りには、名前がありそれぞれ由来があります。中には供養のために千本の卒塔婆が建っていた千本通など怖いものもあったりします。

京都で生まれ育った私ですが、すべての通りを知っているわけではありません。いつか全部の通りを端から端まで歩いて知りたいという野望があります。くまなく歩くと路地や建物好きの私には、発見がありドキドキするのは間違いないです。とはいっても実現するには、時間と体力を要します。そこで相棒の登場です！

大学3回生の時に、ひと夏のバイト代で、ツーリング用に自転車を買いました。今ではあまり見かけないけれど相棒はランドナーで、しっかりと地面をつかむ走りが特徴で京都の北山を駆けまくっていました。所属していた某大学のバックパッキングクラブの仲間と廃村八丁（京都市右京区）まで一泊で行くこともありました。さすがにもう山にはいきませんが、相棒はまだまだ現役で私と一緒にまちなかを縦横無尽に走り抜けています。特に迷路のような細い道（路地）がたくさんある西陣や壬生界隈が楽しいです。昔の行政区の仁丹のホーロー看板、道路元標、マジョリカタイルの祠、化粧地蔵、鐘馗さん、いけず石、井戸やポンプ、長屋の面格子などなど。うっかり見過ごしてしまいがちな歴史あるまちの息遣いを発見するのがたまりません。

ようやく涼しくなってきたので、そろそろ通りを攻めようと思っています。あなたも一緒にいかがでしょうか。

道の真ん中に鎮座するいけず石？

通過してびっくりしたアーケード

自転車沼

和田裕介：
建築プランニング・デザイングループ

私の愛車は、そもそもは、クロモリ（鉄）フレームのクラシカルな自転車でした。

近所の北摂山中をフィールドに、山登りを重ねるうちに、ホイールを交換し、ハンドルを交換し、ステムを交換し、サドルを交換し、シートポストを交換し、ペダルを交換し、クランクを交換し、チェーンリングを交換し、前後ディレイラーを交換し、ブレーキを交換し、最後はフレームまでカーボン製に交換して、いつの間にかヒルクライム仕様に。振り返ると、何一つ原形が残っていないことに気付きます。

自転車趣味は、身体をエンジンとするスポーツ性が強いものの、プラモデルのように、時間をかけて、ゆっくりと機材を作り込んでいけるところが沼感を助長します。…とは言っても、自転車に乗らないと、作り込んだ効果も体感できません。

山の中を走ると、周囲の景色や、森の匂い、水の音、たまに動物とも遭遇、周囲の自然と一体感が魅力です。

ロングライドも良いです。特に○○イチと呼ばれる一周系ライドは、達成感とトラベル感が高めです。

大型のサドルバックにたくさん荷物を詰め込んで、自宅から自走で300キロメートルオーバーの行程ながら、友人達との1泊2日のゆるゆるビワイチ（琵琶湖一周）やアワイチ（淡路島一周）は、大事な心の癒しになっています。

また、ビール片手に夜中のロードレース観戦も楽しみです。特に、ジロ・デ・イタリア、ツール・ド・フランス、ブエルタ・ア・エスパーニャといったグランツール開催期間中は、大抵寝不足です。

このように、自転車は色々な付き合い方ができ、色々な楽しみ方があります。乗ってもいいし、いじってもいいし、観てもいい。とても懐の深いパートナーです。

大阪府茨木市銭原付近にて

移動手段を選ぶ楽しみ

橋本晋輔：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

まちなかに住み、自動車も所有していない私にとって自転車は最も身近で必要不可欠な移動手段です。

ところで、最近まちなかの移動手段が多様化しています。まずは自転車が多様化。子乗せ電動アシスト自転車は、この数年で種類も増えデザインもおしゃれに、乗りやすさも向上しました。また、いわゆるママチャリに加え、ロードバイク、クロスバイクなどもまちなかの移動手段として市民権を獲ました。スマホのアプリで手軽に予約、利用できるシェアサイクルも通勤などにも利用され日常生活の中に定着しています。次は電動キックボード。今年7月に「特定小型原動機付自転車」として定義され、免許は不要に、「自転車を除く」などと標示されている一方通行の道路は逆走可能になるなど、より自転車に近い形で利用できるようになり、まちなかでよく見るようになりました。あとは、タクシー。予約アプリが多くのタクシーに導入されており、利用に対するハードルは大きく下がっています。

私は、マイ自転車を基本にしながら、時々の状況に応じて移動手段を選択しています。一方、これまで書いたような移動手段の多様化は基本的にはまちなかでの出来事。「コンビニも自動車で行くのが普通」という話をよく聞きますが、全国的に見ると自動車「一強」の地域が多いのが実態です。自動車が便利な乗り物であることが間違いありませんが、自動車の運転が好きではないという方もいるでしょう。様々な移動手段を選ぶ楽しみがあるというのも大切なことだなと、まちなかの変化を見ながら感じています。

サイクルイベントが現代アート作品

豊福宏光：
地域産業イノベーショングループ

今回のテーマの自転車について、私自身自転車に特に思い入れや思い出がありませんので、「TOUR DE TSUMARI／ツールド妻有（以下「ツールド妻有）」という現代アートの祭典「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ（以下「大地の芸術祭」）」のサイクリングイベントを紹介させて頂きます。

まず、「大地の芸術祭」とは新潟県越後妻地域（十日町市、津南町）で開催される世界最大級の国際芸術祭であり、日本中で開催されている地域芸術祭のパイオニアです。アートを道しるべに里山を巡る旅は、アートによる地域づくりの先進事例として注目を集めています。２０００年から3年に一度開催されており、２０２２年に8回目（２０２１年開催予定であったがコロナ禍において1年延期）を開催しました。本芸術祭は広大な敷地の中に３００点以上の作品設置や会期中、様々なイベントが開催されます。

今回ご紹介する「ツールド妻有」は、建築家伊藤嘉朗氏が２００６年に企画・発案したサイクリングイベントで美しい里山の風景やアート作品、建築作品などを楽しみながら自転車で巡るアートツアーです。最大で走行距離１２０キロメートルを走るコース。タイムトライアルではないため、風景や地元の人たちのもてなしを楽しむことができるイベントです。そして、今回ご紹介する本イベントの特筆すべき点は、

①サイクリングイベントであり、現代アート作品であること

②移動そのものが作品のテーマであること

③動く彫刻と言われていること（参加者全員が芸術のシンボルカラーの黄色いジャージを着用）

です。

作品（本イベント）が作品（広域に設置された作品）を繋ぎかつ参加者全員が芸術のシンボルカラーの黄色いジャージを着用しているので、走っている場面を遠くで見ていても地域の風景とシンボルカラーのマッチインングが美しく感じます。

さらに、イベントを通じて参加者と地元との交流が生まれ、今では参加者へのおもてなしが地元の方の楽しみになっているとの声もあります。開催当初は１００人程度の参加者が今では１０００人が参加するイベントとなっています。大地の芸術祭は3年に一度の開催ですが、ツールド妻有はほぼ毎年開催されています。私は体力的に参加する気持ちはありませんがもしご興味の方は是非ご参加ください。

ミナミの自転車対策のこれから

竹内和巳：
生活デザイングループ

御津連合（大阪市中央区）では放置自転車のゼロを目指して地元・行政の垣根を超えた議論が始まっています。

アルパックが事務局を務める「（一社）ミナミ御堂筋の会」では、御堂筋の歩行者空間の再整備にあたっての行政と地元の対話の場「地域整備協議会」の事務局も担っています。

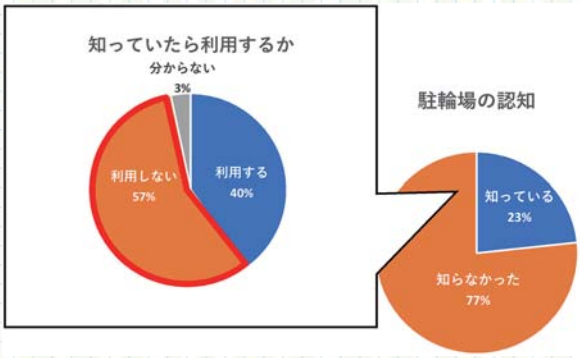
私が担当している「道頓堀橋北詰～長堀通区間」でも、御堂筋整備に関連して、自転車問題の課題が以前よりあがっていました。

ミナミも例外ではありません。以前より、放置自転車の多さが問題となっていました。大阪市も、放置自転車撤去の取組を進めており、ピーク時から放置自転車は大きく減りましたが、近年は下げ止まっている状況です。それぞれの主体で啓発にも取り組んでいますが、それでは対処できない「ヤカラ」も一定いるという事実もだんだんわかってきました。そこで、今年度「**放置自転車ゼロを目指し、対策に向けたアイデア出しや実践に取り組む**」ことを目標に放置自転車対策部会を立ち上げました。

実際に対策に関する意見交換をすると、エキセントリックなものも含めて（笑）、色んなアイデアが出てきます。話を聞いていると、行政としても、「できることならすぐやりたいけれど、実は・・・な事情もあって」ということも実際にはあります。ひざを突き合わせて、それぞれの状況を共有することで、相手の立場も理解して、すぐできること・そうでないことが整理されていき、会議の場も徐々に一体感が生まれていると感じます。

今秋、まずは現在の体制でできることの企画を進めていきます。一方、すぐできることだけでは限界があることも事実です。できることから具体的な動きをつくりつつ、抜本的な対策の議論も進めていきたいと思います。

※道頓堀以南でも、同様の議論が進んでいます。



昨年調査で明らかになったヤカラの存在：
知っていたとしても駐輪場を利用しない「ヤカラ」が確かに存在

【河内長野】夏休みユースワクワクツアー（通称：夏ワク）の開催

夏ワクハイライトムービー→

山口泰生：
地域産業イノベーショングループ

河内長野市は大阪府の南河内地域に位置する人口10万人ほどのまちです。

市内には、南海電気鉄道高野線および近畿日本鉄道長野線の「河内長野駅」が所在しており、大阪中心部からもアクセスの良い立地となっています。産業の特徴としては、豊かな森林資源を背景とした爪楊枝やすだれ産業等が盛んと言われています。

そんな河内長野市では、少子高齢化や人口減少等による事業環境の変化や、後継者不足、市外への転出等による事業所数の減少が進んでおり、これらによる地域経済力の低下等への対応が喫緊の課題となっています。

このような中、国内の各地域では、域内企業等が連携し、ものづくりの現場や会社施設等を公開し来場者に体験をしてもらう「地域一体型オープンカンパニー」の取組が活発化しています。

河内長野市でも同様に、地域一体型オープンカンパニーとして、昨年度から「ワークワクワク河内長野」が発足されましたが、今年度のイベント事務局を、COS KYOTO（https://cos-kyoto.com/）の北林功様（昨年度立ち上げの支援受託）と弊社で支援させていただいております。

今年度は夏と秋の二本柱でイベントを開催することが決定しておりますが、早速8月25日（金）～26日（土）の2日間にかけて、「夏休みユースワクワクツアー（通称：夏ワク）を開催いたしました。夏ワクでは、市内小学生～高校生等の若年層を対象として、普段は見られない現場見学や仕事体験をしてもらいました。

具体的には、金属切削加工の工場見学、農薬の研究所見学、工具のショールーム見学、パワーショベル乗車体験、溶接体験、美容室体験ワークショップなど、さまざまな企画を合計13の市内事業者の皆様に企画いただきました（※当日のハイライトムービーを作成しました。QRコードからご視聴いただけます）。

バスツアーA～Dの4ツアーを組成しましたが、各回とも満員御礼で無事にイベントを終えることができました。

秋の11月22日（水）～24日（金）にも、同様のイベントがバージョンアップして開催しますので、もしご都合があえばぜひご参加ください。引き続き、市内事業者の皆様や、市民の方々のお役に立てるよう努めてまいります。

夏ワクチラシ

幻の都「長岡京」で、子どもたちに歴史文化を伝えるワークショップを開催しました

大塚純子
地域再生デザイングループ

784年に平城京から遷都された「長岡京」は、わずか10年で都が平安京に遷され滅びてしまった幻の都と言われています。

歴史の授業でもなかなかクローズアップされることがなく、歴史が苦手な私は恥ずかしながら知りませんでした。「長岡京」に関しては、まだ知られていないことも多く現在も発掘調査が行われています。それだけでも興味深いのですが、そんな「長岡京」のある長岡京市では、次世代を担う子どもたちの日常へめぶく「未来プロジェクト」事業が進められています。

この業務はその一環で、長岡京市の歴史文化の特徴である「7つのものがたり」を子供たちが楽しく学ぶことができる漢字ドリルの制作と、こどもワークショップを開催し、歴史文化を学んでもらうと共に、ドリル制作のヒントを導き出すといった内容です。アルパックは、子どもワークショップのお手伝いをしました。

ミッションをクリアし、無事宝箱を開けることに成功しました

ワークショップは、「長岡京市の歴史発見！謎解きアドベンチャー」と題し、市内の小学5・6年生を対象に3日間で行いました。1日目は、京都府立大学の上杉和央准教授から長岡京市の歴史のお話を聞き、2日目には、先生のお話から自分が行ってみたいコースを選択し、グループ別でまち歩きを行いました。まち歩きでは、市内の文化史跡・遺跡を巡り、子どもたちがインタビュアとなり、案内人にインタビューを行います。また各ポイントで「長岡京」の歴史に関する謎解きを行い、ゴールでは、各グループで取り組んだ謎解きの回答を組み合わせ「宝箱」を開ける仕掛けです。3日目は自由研究にもなる新聞づくりを行いました。まち歩きでインタビューした内容や自分が面白かった点などを新聞でまとめます。夏休みの宿題の中でも多くの子どもが頭を抱える自由研究になるということもあり、子どもたちは必至で取り組んでいました。新聞の内容をみると、子ども目線で長岡京の歴史の面白さを発掘できていると感じました。

今回参加した子どもたちには、これをきっかけに、まだ知られていない「長岡京」に関して、引き続き興味を持ってもらえればと思います。

板橋区赤塚の「崖線」景観について楽しく学ぶイベントを開催しました

宮英理子
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

現在、板橋区赤塚地区の景観まちづくりの将来像となる景観まちづくりプラン策定の支援をしています。今年度は主に基礎調査、まち歩きやワークショップ、意見交換など、地域住民に向けた勉強会を計画しています。

赤塚地区は板橋崖線を有し、崖線とその周辺地域では、起伏に富んだ地形や樹林地などの自然環境が特徴的な景観を形成しています。崖線とは、河川や海の浸食作用でできた崖地の連なりのことです。約1万年前～5千年前、武蔵野台地は海に面しており、台地との境界が海の波に削られ、崖線が形成されました。赤塚地区では、公園や神社仏閣といった文化資源やみどり、地形のダイナミズムが感じられる坂道が調和した景観が特徴となっています。

地域住民に向けた勉強会として、親子連れを対象とした「ワクワクあかつかPROJECT」、景観まちづくりプランの骨子案作成を目標とした「フムフムあかつかPROJECT」を計画しています。先日、8月6日（日）に、今後の勉強会の周知も兼ねて、赤塚地区内に住む親子連れをターゲットとしたプレイベントを赤塚植物園で実施しました。当日は、巨大な地形模型の展示、古写真展覧会、景品付きのクイズを行い、親子連れからお年寄りまで約60組の方々にお越しいただきました。そして、板橋区の観光キャラクター、ニリンソウの妖精、りんりんちゃんもイベントに駆けつけてくれました！中にはりんりんちゃんに会うために来てくれた子もいたようで、生のりんりんちゃんに、子どもたちも大喜びの様子でした。

坂道の景観です
緑のサウンドスケープも特徴となっています

赤塚地区の巨大地形模型

クイズは赤塚氷川神社の歴史、崖線の成り立ちなどについて出題し、パネルや模型を参考にしながら皆さん熱心に考えてくれました。クイズの景品には板橋区のＪＡから提供いただいた新鮮な夏野菜、駄菓子を配布しました。赤塚地区の高低差を現した巨大地形模型も大好評で、自分の住んでいる家や通っている学校を探したりなど、皆さん興味津々の様子でした。

次回は、第一回「フムフムあかつかPROJECT」として、地形とみどりをテーマにしたまち歩き、意見交換のイベントを計画しています。

観光地というよりは住宅地のイメージが強い板橋ですが、赤塚にある東京大仏の周辺には外国人観光客の姿も見られます。今回、古写真の収集に当たり、タモリ倶楽部で特集されたこともある国分寺崖線と比較して、板橋崖線（特に赤塚地区）の情報やデータの積み重ねがあまり無いことを感じました。今回の取り組みで、地域主体の景観まちづくりが広まり、観光や研究といった面からも、崖線地区としての魅力が注目されるきっかけになれば良いなと思います。

生のりんりんちゃんに戸惑いを隠せない様子…？

巨大模型は起伏も表現されています

北海道松前町のサスティナビリティに関する総合支援に取り組んでいます

畑中直樹：
サスティナビリティマネジメントグループ

今、気候危機、人口減少社会など、サスティナビリティに関しこれまでの延長線上ではない、道筋が必要となっています。

北海道松前町は、北海道最南端に位置する町で、北海道唯一の和式城下町です。また、イカ・松前漬けなどが主要産業でしたが、気候変動の影響も受け、漁獲量は大幅に減り、２０００年に１万人を超えていた人口は、現在約６０００人と急減しています。一方で、近年、町と協定を結んだ東急不動産（株）が運営する大型の風力発電のほか、小型風車も加えると、約90基以上の風力発電が稼働しており、北海道の北上風力発電促進地域にも指定され、注目されている地域でもあります。

こうした背景の中、昨年度、これまでの延長戦ではない、また次世代へバトンタッチしていくための道筋を示す「松前町スマートシュリンクSXビジョン」「松前町DX推進計画」「松前町SDGsチャレンジアクション」を策定し、今年度からは、総務省地域力創造アドバイザーとして町参与の辞令も受け、毎月滞在しながら、町政全般の支援に取り組んでいます。具体的には、エネルギー関連のほか、主要産業である観光、水産業、畜産業の新たな事業展開、行政全般のDX導入伴走支援、地域経済循環に向けた消費行動誘導の仕組み、小学校～高校までの探求学習支援など、多岐にわたります。

再生可能エネルギーという新たな資源を、地域の経済や人材育成にどう活かしていくのかが、地域に問われています。

本事業は、中川ほか、佐藤、原、江藤も担当しています。

祇園商店街で「地域景観づくり協議会制度」の活用が始まります！

中井翔太：
都市再生・マネジメントグループ

八坂神社の門前町にあたる祇園商店街では、平成23年に策定した地域のビジョンに基づき「日本の美意識に出会えるまち」、及び「清々しき参道」を目指したまちづくりを進めてきました。

近年のインバウンドによる観光客の増加や新型コロナウイルス感染症拡大を始めとする昨今の社会情勢の変化により、商店街を構成する業態等も徐々に変わりつつあります。

〝祇園祭の舞台〟〝世界の人々を魅了する東山観光の玄関口〟としてのあり方が問われる状況から、平成24年度に都市計画決定された「地区計画」のグレードアップ変更、京都市市街地景観整備条例に基づく「地域景観づくり協議会制度」の新規導入について検討を行ってまいりました。

検討の成果として、令和５年３月には「当地によりふさわしい宿泊施設への誘導」「民泊・個室型店舗等・ペットショップ等の制限」を趣旨とした地区計画変更に係る要望書を京都市に提出しました（現在、京都市による手続中）。

続いて、令和５年８月には、祇園商店街振興組合（景観委員会）が「地域景観づくり協議会」として、京都市より認定をいただく運びとなりました。

「地域景観づくり協議会制度」は、地域内で建築行為や広告の掲出、事業を行う場合において、地域がめざす景観のあり方を示す「地域景観づくり計画書」に基づき、地域との協議（意見交換）を行うことが必要となるものです。

今後、祇園商店街では、都市計画に基づく最低限のルール（地区計画）と、より良い景観を創造する地域と事業者の対話（地域景観づくり協議会制度）の両輪でまちづくりを進めていくこととなります。

アルパックとしても、千年を超える歴史を持ち、来訪者に感動を与え続けてきた祇園さんの門前の末長い繁栄に、微力ながらお力添えできたことを嬉しく思います。

※本事業は、京都市景観・まちづくりセンター、及び京都市のご支援を得て、当社の地域産業イノベーショングループ、及び都市再生・マネジメントグループの連携により支援させていただきました。

地域景観づくり協議会制度認定式の様子
（京都市門川市長と祇園商店街組合 北村理事長）

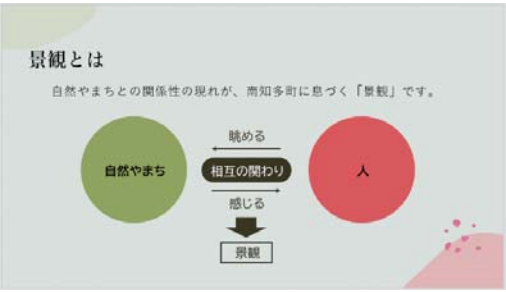
南知多町で景観計画策定のお手伝いをしています

筈谷友紀子：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

南知多町は知多半島南部に位置し、半島の先端と沖合に浮かぶ篠島・日間賀島などの島々からなっています。

国定公園にも指定された美しい自然環境とおいしい魚、海水浴場など観光資源が豊富で、どこか懐かしい旅館・民宿が立ち並ぶ風景も見られます。

景観計画の策定にあたり、住民ワークショップを開催しました。ワークショップでは事務局で撮影した写真のほかに参加者からお気に入りの景観の写真を募り（たくさん集まりました！）、どの景観が良いと思ったか、その理由を尋ねました。半島と島々からなる南知多町ではやはり、海の風景が人気でした。参加者の中には、昼間の海と夕焼けの海を同じ位置から撮影した写真を送ってくれた方もいました。海も時間帯によって印象が変わることを写真で説明していただきました。



お気に入りの風景について語り合う

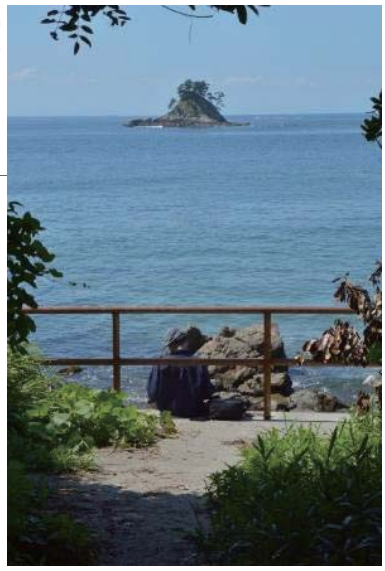
島の中学生は、提灯を飾った漁船で仕立てた「やかた船」に乗るぎおん祭りの写真をお気に入りの景観として挙げていました。提灯の灯りが夜の海に反射し、その煌めきが幻想的とのことでした。

また、島の男性が中学生に、「（半島の中学校で）彼女ができたらどこに連れていき、どんな景色を見せたいか」と尋ねていたのも印象的でした。それに対し、ある中学生は、「恋人ブランコ」というブランコに乗りながら海を楽しめるインスタ映えスポットを挙げていました。南知多町にはこのような、海の風景を楽しむカフェやデッキなどがあることも特徴です。美しい風景を楽しむ場所を創造する取り組みが自然と生まれつつあります。

景観とはただ眺めるものではなくて、眺めることで何かを感じたり、影響を受けるものです。景観によって、人の感性みたいなものが磨かれていくのだと思います。なので、景観づくりは美しい空間・まちなみをつくるだけでなく、感性豊かなひとづくりの取り組みでもあります。

南知多町の景観計画の策定にあたっては、美しい自然風景によって育まれた町民の感性を大切にしつつ、南知多町らしい「眺望」を生み出せるよう取り組みたいです。

手作りの視点場（恋人ブランコ）



南知多らしい海を望む風景

カラフルな外壁が多い篠島

都市計画学会関西支部研究発表会で報告を行いました

筈谷友紀子
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

去る7月29日、日本都市計画学会関西支部第21回研究発表会が開催されました。アルパックからは以下の2件の業務報告を行いました。

◆「業務地における企業の地域連携コミュニティによる景観ルールの策定と運用～道修町通地域景観づくり協定の事例から～」（坂井）

◆「地域住民の個人的体験・記憶における文化財との関わり方について～川越市における地域の歴史遺産めぐり講座の事例から～」（筈谷）

関西支部研究発表会は新型コロナの影響で長らくオンライン開催でしたが、今年度は対面での開催が実現しました。終了後の懇親会も充実した時間でした。アルパックでは第17回以来の報告となりました。今年度ついに対面での開催が実現しました。やはり、対面での開催の方が議論は盛り上がりますし、その後の懇親会も充実した時間でした。アルパックでは第17回振りの業務内容の報告となります。

本稿では、地域住民の文化財での「過ごし方」を、「異なる時間スケール」（日常・ハレの日・人生において特別な日）で尋ね、「場所と人との関わり（＝場所の特徴）」を明らかにしました（図中青枠）。そのうえで、「場所場所の有機的な関係性」（図中緑枠）から地域の特性・特徴の把握が可能ではないかと、報告を行いました。
（「地域住民の個人的体験・記憶における文化財との関わり方について」から抜粋）

未指定文化財について考える～娘と初めての地蔵盆～

水野巧基：
公共マネジメントグループ

未指定文化財について、言葉としてあまり馴染みがない方も多いかもしれません。文化財保護行政ではよく使われている言葉ですが、文化財保護法のもと指定・登録された文化財とは異なり、地域でこれまで大切にされてきたものの指定・登録はされていない歴史的価値のあるモノ・コトのことを総称しています。

平成31年に文化財保護法が改正され、文化財も保存だけでなく保存と活用に向けた制度の整備を進めています。その中で、指定制度しかなかった「無形文化財」や地域の生活文化・祭礼、年中行事などの「無形の民俗文化財」についても、登録制度ができて保存に向けた法整備も進んでいます。

無形文化財や無形の民俗文化財は、これまで地域の人たちによって文化が形成され維持されてきました。しかし、人口減少等の影響を大きく受けており、担い手不足等によって滅失したものも多くあります。近畿では子どもが楽しみにしている「地蔵盆」を実施しなくなった地域も多くなっています。

地蔵盆は、京都では今も残っている地域が多いですが、私が生まれ育った奈良県では残っている地域が少ないです。業務の中で未指定文化財について調査等は行っていますが、住民として関わっていないのはいかがなものかと感じて、約3年前に日本遺産でもあり、地蔵盆と太鼓台が残っている集落を調べて移住をしました。

しかし、コロナ禍で地域行事が中止となり、やっと今年地蔵盆が開催されました。私が住む地域の地蔵盆は、自治会加入者のみが参加できるようになっており、青年会が中心となって子どもが楽しめるように無料の「縁日」や全員が景品をもらえるビンゴ大会を開催していました。歩行者天国にして、自治会館沿いの道路に多くの住民が集まり、この地で生まれ育った人たちも子どもを連れて帰って参加していました。ビンゴ大会の時にも、青年会が秋祭りで太鼓台を担ぐ人たちや子どもを募集する声掛けを行っており、地域の歴史文化を守っていくために活動する人たちに感銘を受けました。

これまで、文化財に関する業務や自治会支援業務に関わる中で「地域の文化財を残すためには、自治会を中心とした地域の担い手が必要」「自治会を継続していくためには、地域住民にとって愛着のある活動や祭りの開催が必要」といった声を多く聞いてきました。今回、住民として初めて地蔵盆に参加したことで、改めてその言葉の重みを感じました。

祭礼をはじめ地域の歴史文化は、時代の変化とともに変わりゆくものです。地蔵盆も、縁日など子どもが楽しめる行事を行いながら地域に根付き大切にされてきました。縁日を楽しみながら、わからないなりにお地蔵さんに手を合わせた2歳の娘を見ながら、色々な温かい感情に包まれた地蔵盆となりました。この記事を読んだ人が少しでも地域の歴史文化等について考えてもらう機会になれば、とても嬉しいです。

近況＆イベントのお知らせ

東　京

「東へ東へ」

東京事務所　山﨑将也

９月中旬、東京事務所はこれまでの神田から隣の岩本町に移転し、新天地での業務をスタートしました。岩本町と言われてもピンとこない方も多いと思いますが、神田と秋葉原の中間に位置するまちで、江戸時代中期から戦後にかけて、古着を扱う露店が立ち並ぶ繊維問屋街として栄え、最盛期には 400 軒もの古着屋が軒を並べていたそうです。現在でも、数は少ないですが衣料品の問屋が残っていたり、問屋街が行うバザールが定期的に開催されたりと、繊維問屋街としての名残を垣間見ることができます。

東京事務所は、これまで新宿、九段、神田と移転のたびに少しずつ東に移っており、今回ついに山手線の外側に出てしまいました。そのせいか、事務所周辺はオフィス街としては意外と静かな（物寂しい）印象があり、神田の商店街の賑やかさからはガラッと環境が変わったことを感じます。

また新しい事務所はセットアップオフィスのため、移転の荷物が非常に少なく済みましたが、東京事務所は規模も小さいため、身軽な状態でいることも一つの選択肢であると実感しました。ただ当然ですが、必ずしも自分達の望むレイアウトや什器などを選べないため、新しい事務所も執務室がやや狭いなど若干の割り切りが必要でした。その分、共用スペースは充実しており、写真のようにソファのあるカフェ的な空間です。

移転してあまり日も経っていませんが、皆様に岩本町の魅力を伝えられるよう少しずつまちを見て歩き、色々な発見をしていきたいと思います。

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

56 回　2023 年 7 月 28 日

「愛されるコモンズをつくる」
講師　社会学者
松村　淳氏

第 56 回適塾路地奥サロンでは、社会学者の松村淳氏をお招きし、著書「愛されるコモンズをつくる」の内容を中心に私的空間を交流の場等として公に開く「コモンズ」についてお話いただきました。

講演では、現在の都市の課題である私的空間と公共空間の分断、公共空間の機能不全等から生まれる暮らしの豊かさや交流の喪失、その発生過程について読み解き、私的空間である自宅の一部を開放したりカフェ等を地域の交流の場として開いていこうとする取組を課題に抗う一つの手段として示し、その開かれた空間を「コモンズ」と呼び、可能性と課題について意見交換を行いました。

「コモンズ」には「街場の建築家」の関わりが重要として、「建築家が設計し、住宅用途だけでなく交流等の目的をもった空家活用」への補助金を設け個別の事例を誘導する制度を神戸市で提案したというお話が個人的には非常に興味深かったです。質疑の中で「コモンズ」の定義について議論になったのですが、今回お話しいただいた「コモンズ」は人と人、人と空間が結びつき社会や都市の中での居場所となるような温かみを感じました。そのような場をどう作っていけるか今後の人生で考えていきたいです。（髙瀬咲）

57 回　2023 年 6 月 16 日

「パブリックスペースとプライベートスペースをつなぐデザイン」
講師　株式会社 GK 京都
常務取締役　門脇　宏治氏

第 57 回適塾路地奥サロンでは、株式会社 GK 京都の門脇宏治氏をお招きし、パブリックスペースとプライベートスペースをつなぐデザインのあり方についてお話いただきました。

講演では、「マイクロパブリック」という概念がキーワードとしてあがりました。従来の「パブリック」は「不特定多数の人々」に合わせる（人が公共空間に合わせる）ようにつくられていることから、個別ニーズへの対応が困難である一方で、「マイクロパブリック」は「近隣住民」に、日常的に利用される場として、個別ニーズに対応可能な空間である（公共空間が人に合わせる）という考え方です。

事例としてご紹介いただいた富山市ブールバール広場では、沿道空間に芝生や丘、デッキ、タープ等が緩やかに組み合わせられ、沿道全体に一体感が創出されるとともに、利用者が思い思いに過ごすことができる多様な小さな空間が生まれていました。

最近では、外で読書したりパソコン作業をしたりする人も多く見かけますが、パブリックとプライベートの境界を柔軟にデザインし、住民が自分だけのお気に入りの場所を見つけ、愛着を持ってもらうきっかけとなりうる「マイクロパブリック」をつくることの重要性を感じました。（竹中健起）

〔レターズアルパック〕241号　2023年9月発行（株）地域計画建築研究所　https://www.arpak.co.jp

まちかど

宇治川堤防道を歩く コミュニティのフット・パス

三輪泰司
名誉会長

イギリスのフット・パス（Foot-Path）はご存知と思います。こちらは「官有地」ですが、ミズとミドリの自由な散歩道です。

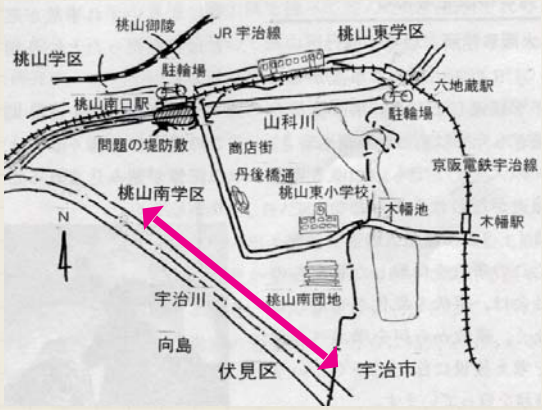
空間的要件　人工物が見えない

左岸は常緑樹が密生して人工的な堤防は見えない。手前、右岸河原は低木に覆われて土が見えない。その間に宇治川が、ゆっくりと流れているのです。右岸堤防天端は、幅2メートル、縁石付きアスファルト舗装、長さは丁度1000メートル（写真・上）。

舗装された　歩きだした

堤防道を人びとが歩くようになったのは、14年前からです。それまでは砂利道で、歩く人は少なかったです。様子が変ったのは、2009年（平成21年）の8月に、舗装工事が完了してからです（写真・中）。いまでは、桃山南学区（京都市伏見区）のフットパスとして、すっかり定着しました。

14年前、何があったのでしょう？ニュースレター149号（2008年4月）に「堤防がすっきりしました」と報告していました。ここでの「堤防」は〝山科川〟の堤防です。堤防は本来、自由な空間ですが、自転車を置いたりして占有してはいけません。およそ600台にもなっていました。2007年（平成19年）7月、国交省淀川河川事務所は「山科川・丹後橋周辺改善懇談会」を設けました。懇談会は実態調査し、12月に対策戦略を答申しました。河川事務所は、〝公権力行使し〟、段階を踏んで、撤去しました。写真下は「レッド」通告看板の様子です。かくて2008年（平成20年）4月「すっきり」しました。翌年度、淀川工事事務所伏見出張所（奥野淳一所長）は、宇治川堤防舗装の予算を計上しました。



見えるモノ、見えないココロ

目につく放置自転車は目のカタキにされますが、モトは人間です。〝横着〟は目立ちます。見えないココロに思いを致しましょう。お年寄が、ひっかかって怪我しないようにと、営々として整理の奉仕をされている交通安全推進委員会の皆さんに。政策立案する議員・役所のみなさん、まちのリーダー、そしてわれわれ、プロは危険を察知する感受性を大切にしましょう。

因みに、149号の「報告」は、まちづくりの教科書のようです。〝目的と手順〟を簡潔に記しています。

表紙写真：（撮影　坂井信行　オランダの田舎道にて）

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

arpak

アルパック（株）地域計画建築研究所
Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp　E-mail：info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9NOVEL WORK Iwamotocho 5F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802（株）よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン（ベトナム）	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward,District1, Ho Chi Minh City, Vietnam		

再エネ100宣言 RE Action
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。